

① 《特集》 活動したい市民団体 私の選択

- ⑫ 《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》
それはやっぱりNPO法成立の日
山岡 義典（市民社会創造ファンド 運営委員長）
- ⑬ 《熊本地震災害 熊本発～現地から伝える「被災地の今」》
世代間交流でコミュニティ形成の場へ
照谷 明日香（熊本学園大学ボランティアセンター ボランティア・コーディネーター）
- ⑭ 《うおろ君の気にな～るゼミナール》
「地域福祉計画」って？
- ⑮ 《V時評》
石牟礼道子さんを偲ぶ
- ⑯ 《続・マーケティングは愛だ ドクター長浜と悩めるNPO》
協働の一步先を行く！
長浜 洋二（モジョコンサルティング合同会社 代表）
- ⑰ 《現場は語る ～コーディネート現場から》
ボランティアコーディネーターのエンパワメントを目指す場づくりの実践から
西木 奈央（京都府社会福祉協議会）
- ⑱ 《市民活動の暦（こよみ）～4月、5月にあったこと》
40年前…4月「男の子育てを考える会」 結成
- ⑲ 《U35》
藤本 遼さん（尼崎ENGAWA化計画代表、場を編む人）
- ⑳ 《この人に》
今井 紀明さん（認定NPO法人D×P 理事長）
- ㉑ 《アゴラ/シネマ/ライブラリー》
「カフェ デ コラソン」／『願いと揺らぎ』／書籍紹介
- ㉒ 《傍聴カフェ～裁判からみえる社会》
ケースNo.6 「ひきこもり殺人」



まちを住み良くするしくみ

赤い羽根共同募金

例えば……

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。



地域で、子育てのお手伝いをしたり、悩んでいるお母さん、お父さんの相談にのる活動や、



障がいのある人が、まちで幸せに暮らすお手伝いをする活動や、



地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者に、栄養の整った食事を届ける活動や、



地域に住むみんなが「安心・安全」に暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。

- 平成30年度共同募金配分申請受付（平成31年度事業対象）
大阪府共同募金会では、大阪府内で行う民間社会福祉事業、更生保護事業、その他社会福祉を目的とする事業を行う法人・団体に対する配分申請を受理します。
▶申請書受付期間＝平成30年5月1日（火）～18日（金）まで
- 平成30年度河原林富美福祉基金配分申請受付（平成30年度事業対象）
大阪府共同募金会では、河原林富美福祉基金により、社会福祉推進事業の支援でこれまであまり手を差しのべていなかった福祉の狭間の事業や福祉の周辺領域で支援を要する事業に対する配分申請を受理します。
▶申請書受付期間＝平成30年5月31日（木）まで

一定条件が必要ですので、詳しくは、大阪府共同募金会ホームページ

<http://www.akaihane-osaka.or.jp>

をご覧ください。

問合せ＝大阪府共同募金会

TEL:06-6762-8717 FAX:06-6762-8718

Eメール:ai-kibou@akaihane-osaka.or.jp

（件名に「配分申請について」と明記してください）

活動したい市民団体

私の選択



日本クリニックラウン協会、2 ページ



舞台芸術制作者オープンネットワーク、5 ページ



Design Net-works Association、3 ページ



トイボックス、4 ページ



Homedoor、8 ページ

「応援したい」という気持ちにさせる市民団体とは、どんな団体だろうか。それを探るため、いま市民活動の世界で活躍している方たちに「もしも可能なら、ご自身の団体以外で活動してみたい団体はどこか、そこでどんな活動をしたいか」を尋ねてみた。

共感を呼ぶポイントは、団体が展開している事業や活動の中身なのか、取り組む社会課題の重要さなのか、それとも、頑張っている姿なのか、活動しやすい組織風土なのか。選ばれた22の市民団体を、団体運営や事業のヒントに、また支援・協働対象の団体を考えるヒントにしてほしい。



東日本大震災復興支援財団、9 ページ



沖縄NGOセンター、9 ページ



ブラジル日本交流協会、10 ページ

【特集チーム】

百瀬 真友美、磯辺 康子、永井 美佳、中川 智子、野崎 瑛海、早瀬 昇、村岡 正司、山中 大輔



伊賀市社会福祉協議会、8 ページ



アースウォッチ・ジャパン、10 ページ

認定NPO法人 日本クリニックラウン協会

大阪市北区末広町3-11 天しもビル3B

編集部インターン 野崎 瑛海^{えみ}



NICU (新生児集中治療室) も訪問



病室を個別に訪れてワクワク・どきどきできる「こども時間」を届けるクリニックラウン



毎年8月7日(はなの日)に「RED NOSE DAY with Cliniclowns」を開催
提供(3点とも)=日本クリニックラウン協会

すべてのこどもにもこども時間も

すべての子どもが子どもらしくいられるように。赤い鼻がトレードマークのクリニックラウン(臨床道化師)たちは病院生活を送る子どもたちのもとを定期的に訪問し、彼らが主体的に遊べる環境づくりをしている。

活動の主役は子どもたちだ。クリニックラウンは目の前のひとりひとりに合わせて、楽器を奏でたりスカーフを使ったりして想像力豊かに遊ぶ。ときには医療スタッフや親などの大人たちも巻き込み、

病院という閉鎖的な空間に新しい風を吹き込んでいく。

「子どもたちには笑顔になってほしいけれど、笑顔だけが子どもらしさというわけではありません」と、日本クリニックラウン協会(以下、協会)の熊谷恵利子^{くまがひ}さんは言う。大人は子どもたちの笑顔を意識するしないにかかわらず期待しがちだ。だから、大人を心配させまいといつも無理して笑っている子どもを、熊谷さんは指摘する。笑顔でなくてもいい、その子がその子らしく、子どもらしくいられるように。それが一番の目的である。協会では、定期訪問を大切にしている。病院によつて頻度は異なるが、だいたい週に1回から月に1回のペースで訪問することが多い。毎日見ている医療スタッフとは違った目で、定期的に訪れるクリニックラウンたちは子どもたちの変化を感じとることができる。

最初はそつけなかつた子も、いつの間

にか、次回クリニックラウンが来たときに仕掛けるいたずらを計画したりしながらわくわくして待つようになる。

自分自身も成長

クリニックラウンになるために特別な資格はいらないが、彼ら彼女らは常にプロフェッショナルとして活動している。遊びやかかわり合いの中で子どもたちの身体のしぐさなどからメッセージを読みとり、対応するには高度な状況判断力が欠かせない。この活動は確実なスキルが必要となる。

協会では、クリニックラウンを育てるために一年かけてトレーニングをしている。クリニックラウンの林優里さんは、「自身を見つめ直す時間というのが一番つらかった」と振り返る。それでも、ワークを通して見えてきた自分の性格や癖を受け止め、意識していつもと違う行動をしてみることで自身の可能性が広がり、豊かな関わり方ができるようになる。そう。これを超えるければクリニックラウンになるための審査を通ることはできない。

現在は、「RED NOSE DAY with Cliniclowns」などの開催イベントの補助や発送作業等にボランティアが参加している。その際には必ず協会のスタッフ

この団体でこんな活動がしたい

日本クリニックラウン協会で、クリニックラウンの「助手」をやりたいです。専門的なトレーニングを経て認定されるクリニックラウンをやりたいと言うのは、はばかられます。助手の助手くらいでもいいので、病室の子どもを見守ることに関わりたいです。

そう思うのは、被災者支援の経験もあつてのことです。自分には何の落ち度もないのに、突然日常から切り離され、慣れない環境での生活を強いられ、やってくる「支援者」には「ありがとう」と言うしかない点で、病室と避難所は似ています。そんなとき、何の特別感もない大人がそつとたたずんでいると、気が緩むというか、会話はなくても目線で気持ちがふれあえます。ボランティア活動するとしたら、クリニックラウンのかたわらで、助手をしながらそんな存在でいられたらと思った次第です。

田村 太郎さん(一般財団法人ダイバーシティ研究所 代表理事)

が、この作業は何のためにしているのか説明し、病院での活動などについて話すようにしているそうだ。また、今年7月からは協会の活動を文章にしてくれる広報ボランティアも募集する予定だという。

クリニックラウンの本場オランダでは、小児病棟でのクリニックラウンの存在は当たり前のものである。日本でもこの活動が普及し、一人でも多くの子どもたちが、子どもらしく過ごせる時間を取り戻すことを協会は目指している。

特定非営利活動法人 Design Net-works Association (DNA)

群馬県高崎市鞘町10 立駐高崎ビル3階
高崎中部名店街事務所内

編集委員 村岡 正司



居場所を見いだしたきっかけ

群馬県高崎市に拠点を置く Design Net-works Association (以下、DNA) は、高崎経済大学地域政策学部教授(当時)の大宮登さんとそのゼミ生の手で、2004年に設立された。若者の社会活動の企画支援をミッションに、群馬の地域活性化をめざした事業を行政などと連携して展開。ニートやフリーターを対象に就職支援をおこなうジョ



提供(3点とも) = Design Net-works Association

ブカフェや、コミュニティラジオ放送の運営などに、設立後10年間で約1000人の学生がボランティアとしてかかわった。代表理事の沼田翔二朗さんは北海道の出身。大学入学を機に高崎で新生活を始めたが、周囲の環境になじめず苦しんでいた。大学からも足が遠のき、ひきこもり生活は約1年続いた。生活のために働いたアルバイト先の飲食店が、唯一沼田さんと社会をつなぐ窓だった。そこで出会った6歳年上の先輩は、いつも元気がない沼田さんに、ささいなことでも優しく声をかけた。「ありがとう」「助かるよ」

少しずつ自信を取り戻し、「自分を変えたい」と、初年次ゼミの担当だった大宮さんに相談。それを契機に09年よりDNAでボランティアを始めた。居場所を見いだし、運営の

中心を担うようになったころ、定年後に数年後に控えた大宮さんからDNAを引き継ぐ決意をする。

若者に社会を届ける

「仕事として次のステージに上げていこうと思ったんです」。14年、代表に就任してまもなく、群馬の山間部の中学生に、ひきこもりから立ち直った自分の体験を語る機会を得る。沼田さんの飾らない言葉に頷き、将来への不安を口々に発する生徒たち。思いは通じた。かけがえない先輩との出会い。大宮さんとの出会い。苦しい状況を乗り越えられた自分の体験が特別なものでなく、当たり前になるような社会にしたい。事業化にむけ、高校生約500人にアンケートを行い、現場の教員と話し合いを重ねた。

大学生や社会人のボランティアスタッフ「センパイ」が、将来にむけての岐路に立つ中高生に贈るキャリア教育プログラム「未来の教室」は、15年11月からスタートした。成功者が講師を担う進路講演会とは一線を画し、大学生活や仕事で直面した課題にどう向きあったかなど、試行錯誤した体験を、ちょっとした世代である「センパイ」が赤裸々に語る。10時間以上の研修を受けて出張授業に臨む「センパイ」は、学校のO

B・OGなど身近な存在。「人との関わりと対話から学ぶこと」「自らの行動から学ぶこと」を柱に、中高生だった頃の湧き出る気持ちを言葉にする。
今や主力事業になった「未来の教室」には、県内を中心に約3000人の中高生たちが参加した。学校教育と連携し「子ども・若者に社会を届ける」DNAの活動は、未来にむけて進化を続けている。

この団体でこんな活動がしたい

高校生のキャリア教育事業として、社会人や大学生を「センパイ」として高校に派遣する活動に参加したいと思っています。もともとは地域活性化のためのまちづくりNPOとして設立された団体ですが、それには若者たちのキャリア教育が大事、地域の魅力ある大人たちと接点を持つことが重要と気づき、事業領域を変化させていった。その進化が本当に素晴らしいと感じますし、OBや現役学生中心の若さあふれる運営スタイルも、ついつい応援したくなります。

DNAの拠点は群馬県高崎市。私の出身地でもあります。活動を通じてふるさと群馬の高校生と触れ合えることはとても貴重な機会になるでしょう。ふるさと納税ならぬ、ふるさとボランティア、という形で、ぜひいつか故郷に恩返ししたい。そう考えています。

山田 泰久さん(特定非営利活動法人CANPANセンター 代表理事)

ウォロ君の 気にな〜る セミナー

Vol.99

「地域福祉計画」って？



まんが ■ラッキー植松



2018年4月に施行された改正社会福祉法により、地域福祉計画の策定が地方自治体の任意とされていたものから努力義務化されることとなった。社会福祉領域における計画は、1989年に「高齢者保健福祉推進十カ年戦略（ゴールドプラン）」を策定して以降、障害、児童など分野別に急速に広がっていった。地域福祉計画はそれらの対象別の分野ごとに策定されてきた計画を総合化することを特徴としている。また住民参加を通して策定することが規定されており、①地域の中で地域とともに当事者の生活を支えていくという福祉の共通の理念を示すこと、②そのために必要な基盤整備を具現化すること、③従来の分野別の計画の範囲から漏れてしまう課題に対して、地域の中で新たな取り組みを施策化することが地域福祉計画の主な役割である。

行政計画と聞くと複雑でわかりにくく、自分たちの生活とは関係のないものと考えてしまいがちであるが、地域福祉計画は、住民参加が規定されているように、自分たちの暮らす地域をより豊かにしていくために、住民が関わっていく仕組みであるとも言える。

編集委員 竹内友章

ウォロ・バイダー、 いかがでしょうか？

ウォロ2年分(12冊)を
挟み込めるバイダーです。
(ウォロ1冊500円+送料250円)
お問い合わせはウォロ編集部 / volo@osakavol.org まで





交流会の案内

カフェ デ コラソン

京都市上京区小川通一条上る華堂町593-15
電話 / 075-366-3136
通常の営業時間 / 9:00~18:30
(ラストオーダー18:00)
定休日 / 日曜日・第3月曜日(祝日の場合は営業)
<http://cafe-de-corazon.com/>



交流会のひとつ。カウンター内右側が川口勝さん、左側が友樹さん



入口。もとは鮮魚店

「カフェ デ コラソン」

立 春過ぎの早朝。小雨交じりの厳寒のなか、一人、また一人と、京都御所近くの住宅

地にある「カフェ デ コラソン」の扉を開く。200円の会費を支払い、自家焙煎の特製コーヒー、コロンブレンドを紙コップに注ぎ、思い思いの席につく。自家製クロワッサンを朝食代わりにする人も。交流会は午前7時にスタート。程なく奥のテーブル席は埋まり、カウンターも満席だ。顔見知りのグループ、たまたま隣り合わせた人

たち。学生、主婦、会社員、幼児連れ……。店内は、活気あふれるコミュニティスペースになった。8時45分の閉会までは、出入りも、コーヒーのお代わりも自由。「自己紹介を強制されたくない方がいい」「職場では決して出会えない人たちと話ができる。それが、楽しい」「モーニング・コーヒー・クラブ」と名づけられたこの交流会は、店主の川口勝さんと、連れ合いの友樹さんの手で、2013年の開店以来、ほとんど休みなく、毎週土曜日に開かれている。

勝さんがかつて店長を務めていた東京・台東区の「カフェ バッハ」。国内外のコーヒー愛好者に知られ、スペシャルティコーヒーの提供はもちろん、接客にもすぐれた名店だ。「ご近所の常連さんが楽しんで通う、心のよりどころでもあるんです」。バッハで働いた約10年、勝さんは、コーヒーの淹れ方や知識はもとより、現在のコラソンの原点ともいえる、大切なものを学んだ。

「うちは、地域のサロン。お客さん同士が横のつながりをつくる橋渡しも、その役割だと思っています」。「コラソン」とはスペイン語。「心」や「情愛」という意味をもつ。

編集委員 村岡 正司



高齢者が動けば社会が変わる NPO 法人大阪府高齢者大学の挑戦

NPO法人大阪府高齢者大学校編、ミネルヴァ書房、2017年4月、1800円+税

人口の4分の1以上が65歳以上という、世界でも類を見ない超高齢化社会の日本。今後さらに高齢化率が高まると予測される社会において、シニアがシニアを支える仕組みが必要になってくる。

そのときに、「学び直し」は一つの大きな効果を発揮するのではないだろうか。

大阪に歴史ある高齢者のための学び舎がある。1979年2月に「老人自身の生きがいがづくり及び地域老人活動のリーダー養成」を目指して大阪府老人大学がスタートした。地方自治体が運営する高齢者大学は珍しく、注目を浴びてきた。しかし、2000年代の行政改革の名のもと、09

年閉校となる。ここでの学びの灯を絶やしてはいけない、と独立した組織として運営を始めたのが、本書の編者である大阪府高齢者大学校である。①学習する、②仲間づくり、③健康づくりの3本柱プラス社会への恩返しをモットーとしている。学びのカリキュラムは、歴史、語学や美術芸術、パソコン、自然、運動、健康など幅広い。特に歴史が人気講座の一つだ。はじめは、受講生として入学する。そして、受講生の中からクラス運営を担う人材を育成する。大学校の創立10周年を迎えるのを機に企画されたのが本書である。

この中では、NPO法人の歩みや学習が高齢者にもたらす意義

などについてまとめられている。中でも注目したいのは、高齢期における「プロダクティブ・エイジング」の可能性だ。「プロダクティブ・エイジング」とは、高齢者の持っている能力や経験値などを、有償・無償を問わず、モノやサービスを生産することに生かすことを指す。学びを自分のものだけにするのではなく、家族や友人、地域社会のために提供することは、これからの超高齢化社会を乗り越える一つの大きな力になるだろう。

大阪府高齢者大学校がその先陣を切ってくれるのではないだろうか。本書を読んで、そんな期待を胸に抱いた。

編集委員 久保 友美

～市民視点のドキュメンタリー映画を紹介する

今月の作品 「願いと揺らぎ」



©ピーストゥリー・プロダクツ

4月28日より仙台セントラルホール
ほか全国順次公開
監督・撮影・編集:我妻和樹
製作・配給:ピーストゥリー・プロダクツ
プロデューサー:佐藤裕美
宣伝:佐々木瑠都
2017年/日本/147分



イラスト: 杉浦 健

●今月の館主

しまだ りゅういち
島田 隆一

2012年、映画『ドコノモイケナイ』を監督。本作で2012年度日本映画監督協会新人賞受賞。その他、『いわきノート』(2014年/編集)、『桜の樹の下』(2016年/プロデューサー)。現在、日本映画大学非常勤講師。「ドキュメンタリー映画って、観るよりも作る方が数十倍面白いよ!」いつも思います。

震災から7年、私たちは今、何を想うのか

我妻和樹監督作『願いと揺らぎ』は、2008年から東

日本大震災当日までの3年間で追った「波伝谷に生きる人びと」の続編であり、震災から1年後の人々の、まさに「願い」と「揺らぎ」を映し出した力作である。

宮城県南三陸町の小さな漁村・波伝谷。震災前に約80軒あった集落が、1軒だけを残して壊滅した。そんな中、地域の伝統行事である「お獅子さま」復興の過程をめぐり、集落の人々の想いが錯綜する。カメラの前で訥々と話す村人たちは皆、「お獅子さま」の再開を願っている。そして再開することで、もう一度集落が団結することを願っている。その想いは同じで

あるはずなのだが、いざとなると、どのように再開させるかで意見が食い違っていく。また、漁業の共同化など、彼らの生活面でもさまざまな思想が噴出し、少しずつずれ違っていく。

本音と建て前があり、土地に縛られた関係性があり、それでも自分のために、誰かのためにと動く人たちがいる。とにかくここまで地元の人たちに密着し、彼らの想いに寄り添った映画があったらどううかと驚嘆した。地方都市の抱える人間関係の難しさを捉え、それと同時に家族のような強固な繋がりをも目の当たりにする。震災直後から叫ばれた「結」や「絆」のような絵空事ではなく、地方にお



ける共同体のあり方をまざまざと見せられたような気がした。何より我妻監督の目を通してみる波伝谷は、煩わしいのだけれど最高に愛おしい。こんな風に波伝谷を描けるのは、震災前からこの場所に通い続けていた我妻監督だからこそである。

そして、それらの想いの背景に、ふっと挿入される震災前の映像。当たり前だが映画に登場する人々には震災前にも生活があり、人生があった。ドキュメンタリーだからこそ、この時間の往還は圧倒的な説得力を持つ。

震災から7年。私は今まで何を見ていたのだろうか。そんな自問をしながら映画を観終えた。



ボランティアを生まだすもの
利他的計量社会学

三谷はるよ著、有斐閣、2016年12月、3500円+税

本書の関心はタイトルが示すとおりシンプルだ。著者・三谷はるよさんは、幼少期に抱えていた「どうして人は、人のためになるようなことをするのか」、すなわち「人はなぜ利他的な行為をするのか」という問いを、多変量解析を核にした計量社会学の手法で明らかにする。

三谷さんは、ボランティアが盛んな欧米の先行研究から、本人の収入や教育水準(年数)などの社会的資源が参加を促すとする「資源理論」、本人の性格傾向、中でも他者への共感の心が行動を導くとする「共感理論」、宗教の影響を重視する「宗教理論」、そして幼少期からの他者と

の関わりや学校教育の内実が作用するという「社会化理論」の四つを抽出し、それら相互の関係を実証的に明らかにする。結果、特に幼少期から、利他的行為をする他者に接触し、母親の宗教的行為を身近で見ていたことが、「共感」の気持ちや広い意味での「宗教心」を育み、さらに人や社会の多様性に気づかせるような教育水準の高さが、ボランティア行動に人を駆り立てると結論づける。そして互酬の関係が濃密にあるコミュニティがボランティアへの参加を高めるとし、そうした環境づくりが、ボランティアを生まだす日本社会になるために重要だと指摘する。

わたしの経験からは、ボランティアへの参加そのものも喜びや充足が、持続や反復の主要な動機になるように思えるが、残念ながら本書ではその点には触れられていない。計量社会学の意義のひとつは、要素間の予期しない関係を数量データから見つけ出す点にあり、わたしたちの「実感」とズレることもしばしばだ。ただこのズレは、多様な要素からなる人間の行為理解にはむしろ重要な視点を提供する。本を通じた三谷さんとの対話を楽しみながら、ボランティアに関心をもつ人々の間での議論を拓ききっかけにしてみれば、と思える一冊だ。

編集委員 工藤 宏司